

〔病・虫害発生概況〕

病 害

麦類病害

黄さび病の初発生は平年よりかなり早く（半月～1カ月）、小麦での発生は各県とも近年になく著しく、4月下旬～5月中旬にかけてまん延し、とくに熊本以北で甚しかった。しかし、裸麦・大麦では発生面積、被害とも比較的少なかった。黒さび病も初発生が一般に早く（平年より半月～1カ月以上）小麦に多発して5月上旬～下旬のまん延は甚しかったが、裸麦・大麦では比較的軽かった。赤さび病・小さび病の発生も平年より早かった。しかし、両者が大分で多日に発生し、小さび病が長崎でかなり多発した以外は、全体は並～少目の発生であった。

今年度のさび病類の発生が早く、しかも近年稀に見る多発生となった原因については、次のことが考えられる。麦類の播種が全般におくれたため初期の生育は良くなかった。それが3月の高温で急に生育が促進されて軟弱徒長し、抵抗性が低下したので発生が早くなった。ついで4～5月は少雨で一時的に気温が低く、麦の生育がややおくれた上に、一方では病原菌の増殖まん延には好適な条件であった。また、黄さび病ではシナ大陸からの黄沙の飛来が平年より時期が早くて回数も多く、とくに2月上旬および3月中旬の強度が強かったこと、黄さび病・黒さび病で抵抗性の弱い品種が作付されていたことが原因の一部となったと推定される。

うどんこ病は全般に平年並の発生、赤かび病は出穂前後の降雨が少なかったため、南九州の早生裸麦・大麦での発生がやや多かったほかは、きわめて少発生に終った。

粟種病害

粟種の生育はやや不良であったが、開花はやや早かった。この時期に雨が少なく、また落花後の低温のために菌核病の発生は少なかった。

そさい類病害

馬鈴薯疫病は5月中旬～下旬が少雨多照であったので一般に少発生であった。その他、キウリで新しいウイルス病として、春には緑斑モザイク病（CGMMV）が福岡、佐賀、長崎、熊本、大分で、また秋にはキウ

リモザイクウイルス（CMV）の一系統による果実の奇形が福岡、長崎、熊本で確認された。

稲病害

早期栽培：南九州では生育初期の多雨のため黄化萎縮病がやや多かった。しかし、5～6月の少雨多照で葉いもちの発生は少なく程度も軽かった。従って、穂いもちの発生も少なく、これには出穂後の好天候も幸いしたであろう。

紋枯病は平年並の発生であった。白菜枯病は南九州で多日の発生で、6月下旬～7月上旬の豪雨が関係していると考えられる。

ウイルス病については、萎縮病が北九州では並～少の発生、中部以南ではやや多く；縞葉枯病は全般に平年以下の発生；黄萎病は南九州ではやや多日の発生；すじ萎縮病は宮崎で少発生であった。

普通期栽培：苗代の葉いもち全般に平年より発生がおそく少発生で、従って本田への持ちこみが少なく、また移植後梅雨があけてからの好天候も影響して、本田の葉いもちの発生は少なかった。葉いもちが少なく、出穂期の天候がよかったので、穂いもちも山間地方の一部を除けば全般に少発生であった。また、今年は穂枯れも少なかった。なお、熊本で支那籾系の品種に発生した穂いもちの病原菌の菌型（レース）はC-3に属することが判った。

黄化萎縮病は苗代中期までの降雨が少なかったため少発生であった。白菜枯病も中部以北では苗代期に降雨少なく、また本田移植後の高温乾そうのため発生がおそく、発生面積、発生程度ともにきわめて少なかった。しかし、南九州では6月下旬～7月上旬の豪雨のため発生がやや早く多日の発生となったが、8月、9月の台風にもなう大雨にもかかわらず、9月後半の低温のため後期の進展は比較的ゆるやかであった。

紋枯病は初期には平年並～やや多日の発生であったが、出穂後の上位への進展がゆるやかで程度は軽く、全般に並～少の発生に終った。心枯線虫病も同様に少発生であった。

ウイルス病では、萎縮病が北部九州では並～やや少、中南部ではやや多～多の発生であった。縞葉枯病は全般に少発生であったが、熊本では後期発病がやや多かった。黄萎病は中部以北では少発生、南九州ではやや多発生で、黒すじ萎縮病は大分、宮崎で少発生した。

その他、北部九州の山より地方のやや早植の稲に糊枯細菌病の発生が目立ったのと、福岡、大分、宮崎などで主として中生品種に9月下旬、萎凋現象（青枯れ）が局部的に見られた。後者には8～9月の高温と根ぐされが関係しているようである。

虫 害

ニカメイチュウの越冬幼虫調査では発生経過はややおそく、発生量も平年並かやや少な目であった。

宮崎、鹿児島ではサンカメイチュウがやや多いのではないかと案じられたが、第2世代・第3世代期にも発生は少な目に経過した。

稲ウイルス病媒介性のウンカ・ヨコバイ類では、ツマグロヨコバイは越冬世代虫はやや多く、発生経過も例年よりも早く、第一世代の幼虫期・成虫期には警報が出された地方もあった。南九州では6月下旬頃より異常飛来も見られ、萎縮病、黄萎病も多発生であった。

一方ヒメトビウンカは越冬世代虫も少な目でその後も少な目で経過し、例年しまではがれ病の多発生が問題となる地方でも、大した発生には至らなかった。

今年は特にセジロウンカ、トビロウンカの大発生が全国的に大問題となったが、九州では特に鹿児島、熊本等で6月下旬より7月中旬にかけてセジロウンカ、トビロウンカの顕著な異常飛来が見られ、7月中・下旬にかけて移植後間もない稲に対するセジロウンカの飛来成虫による吸汁害、産卵痕による黄変が大問題になった。北部九州でも山間山麓の早植地帯で、この飛来虫およびその次世代幼虫による被害が目立ち、徹底的防除が行なわれた。トビロウンカでもセ

ジロウンカと同じ頃の6月中旬から7月中旬にかけて異常飛来が見られ、その後8月上・中旬～9月上・中旬にかけて早植稲を初め普通期稲にも坪枯れを呈する地帯が見られた。9～10月にかけては主にトビロウンカによる坪枯れが普通稲にところどころ見られたが、東海近畿などに見られた程の大被害には至らなかった。これは年々ウンカの発生に対する予防技術が進歩しているためであろう。

苗代初期に各地でキリウジガガンボによる苗立ち不良が伝えられた。また所によっては播直しを行った地方があったが、4～5月期の誘殺数が例年より多かったことから、多発が懸念されていたものである。

次に問題になったのはコブノメイガ、タテハマキの発生が、中部・南部九州では例年より多発生した地域が多く、注意報を発した地方があった。特に鹿児島県ではコブノメイガの異常発生対策にも多くの農業が使われた。

アヲトウの多発生が懸念された地方（熊本、福岡等）があり、警報、注意報も出されたが、大発生に至らずにすんだ。

宮崎で早期にツトムシの発生した地方があり、長崎のオカボノアブラムシ、鹿児島でフタオビコヤガの局部的発生、サツマイモのナガジロシタバ、ハスモンヨトウ等の被害があったが、その他は、ツトムシ、ダイメイチュウ、ミナミアオカメムシ、クロカメムシ等も平年並かやや少な目に終わった。

長崎におけるムギノヤノハモグリバエも作柄への影響が懸念されたが、北部地方に限られ、終熄状態となった。また宮崎市においてこの県ではじめてジャガイモが種子用圃場で発見された。